

# 行動障害への指導力向上に向けたOJTプログラムの効果Ⅱ

～特別支援学校でのプログラムの効果の検討と修正を通して～

○野村 理絵 (鹿児島大学教育学研究科) 肥後祥治 (鹿児島大学教育学部)

KEY WORDS: 行動障害, 行動分析, OJT

## I. 問題と目的

行動障害が多くみられるのは、中学校及び高等学校（あるいは特別支援学校中等部及び高等部）を中心とする学齢期である(井上(2010))。現在、障害者福祉の領域においては、行動障害に対する全国共通の研修プログラムが展開されているが、学校教育においては、行動障害に対する全国共通の研修プログラムは存在していない。学校現場は、行動障害への対応は、各職員の個々の経験に頼っているのが現状である。この問題に取り組むためには、学校において展開できる研修プログラムの開発が必要である。

そこで、本研究では、特別支援学校教員用の行動障害の支援に特化したOn the Job Trainingの研修プログラム(以下OJTプログラム)の実施を行い、その効果の検討とその修正を行うことを目的とした。

## II. 方法

### 1. 参加者

K県内にあるB特別支援学校(以下B校)の現職の教員及び寄宿舎指導員のうち、本研究企画に対して自発的に参加を希望した計11名(小学部1名, 高等部6名, 寄宿舎4名)。また、研修参加者のプログラムの実施対象者としては、同校に在籍する行動障害の指導等に教職員が不安や疑問を感じている生徒3名(高等部3名)。また、プログラム実施前後に、研究の趣旨や個人情報の取扱について説明を行い、参加教職員本人および対象者保護者から同意を得て研究及びデータ収集を行った。

### 2. 期間

プログラムは、X年10月から12月にかけて1回120分(計5回)であった。また、2ヶ月後にフォローアップを実施した。

### 3. 研修プログラムの概要

プログラムは、2015年に同じK県内にあるA特別支援学校(以下A校)で実施したOJTプログラム(肥後(2015))を同様に行った。A校とB校の違いは、寄宿舎の有無である。プログラムは、講義とグループワーク(以下GW)さらに質疑応答を含めた演習を中心に実施した。

Table 1 研修プログラムの内容(下線は、GW)

プログラム	主な内容
第1回	・KB PAC, ABC-Jの実施 ・行動分析の基本的概念 ・対象児の標的行動を設定
第2回	・行動を減らす手立て ・ <u>実際の記録を分析し、指導プログラムを組み立てる。</u>
第3回	・行動を増やしていく手立て ・ <u>実際の記録を分析し、指導プログラムの評価と再検討</u>
第4回	・行動の理解モデル・プログラムの修正や新しい取組検討
第5回	・これまでの取組の経過や状況について ・KB PAC, ABC-Jの実施(2回目)
フォローアップ	・事例報告書を基に指導プログラムの経過や結果の共有 ・最終アンケートの実施

### 4. データ収集

データの収集は、プログラム実施前後のKB PACと異常行動チェックリスト(ABC-J)、プログラム終了後のアンケート、事例報告書による

データ収集を行った。

## III 結果と考察

本報告については、KB PACとABC-Jについて報告する。

### 1. 参加者の知識への影響

行動分析的対応に関する知識を測定する際に用いられるKB PACを使い、プログラム参加者の参加前後の数値の値の変化についてFig.1に示した。全体の平均は、参加前:14.1点(SD=3.188)、参加後:15.6点(SD=2.618)であった。t検定に掛けたところ

統計的に有意差は認められなかった( $t=-1.602$ ,  $df=10$ , 両側P値=0.1403, 片側P値=0.0702)。さらに教員と寄宿舎指導員毎に平均点の分析を行った。教員の平均は、参加前:14.0点(SD=1.789)、参加後:16.3点(SD=2.422)であり、5%水準で有意差が認められた( $t=-1.898$ ,  $df=10$ , 両側P値=0.0869, 片側P値=0.0434)。また、寄宿舎指導員の平均は、参加前:11.6点(SD=3.512)、参加後:13.3点(SD=2.082)で統計的に有意差は認められなかった( $t=-1.890$ ,  $df=2$ , 両側P値=0.1994, 片側P値=0.0997)。

### 2. 対象者への行動の影響(ABC-J) Fig.2 ABC-Jの得点の変化

4名分のABC-JのデータをFig.2に示した。対象者のうち、Ⅲは、同一人物であり、学校・寄宿舎の複数の場で実践している。いずれも数値が変化しており、t検定を実施し、1%水準で有意な差が認められた( $t=9.847$ ,  $df=3$ , 両側P値=0.0022, 片側P値=0.0011)。このことは、本プログラムが生徒の行動面に変化をおよぼす可能性を示唆している。(NOMURA Rie, HIGO Shoji)

Fig.1 KB PACの得点の変化

